

PRESS RELEASE

泉屋博古館東京

SEN-OKU
HAKUKOKAN
MUSEUM TOKYO

特別展 唐物誕生
—茶の湯デザインの源流をさぐる— (仮)



2026年11月3日(火・祝) – 12月13日(日)

《展覧会概要》

中世後期における茶の湯の形成のうえで大きな役割を果たした、いわゆる「唐物」の源流を、住友コレクションの代表的存在である中国の殷周青銅器に求め、3000年以上にわたる東アジア文化史の視点から茶の湯のデザインをとらえなおそうという展覧会。胡銅（古銅）と呼ばれる唐金製の花入に着目し、「名物」が誕生する過程を追いかけ、さらに絵画作品やその他の工芸品もあわせて展観し、唐物が飾られていた空間や美意識の変化にもせまります。

《本展のみどころ》

1. 泉屋博古館と茶道資料館、そして芦屋釜の里の三者のコラボによる初の展覧会！
共同研究の成果にもとづき、茶の湯デザインの源流にせまる挑戦的な内容に
ぜひご注目ください。
2. 世界最高峰と称される住友コレクションの中国青銅器と、国宝・重要文化財をふく
む茶の湯の名品の数々が共存する展示空間はここでしか見られません。
異色のコラボから、茶の湯デザインの背景をなす悠久の歴史の流れを体感いただけ
ます。
3. 普段はあまり注目されない茶の湯のなかの金工品を重点的に取り上げ、
そのデザインに込められた文化的背景を丁寧に掘り下げていきます。

《基本情報》

展覧会名	特別展 唐物誕生—茶の湯デザインの源流を探る（仮）
会 期	2026年11月3日（火・祝）～12月13日（日）
開館時間	11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、11月24日（火）※11/23（月・祝）は開館
入 館 料	一般1,500円(1,300円)、学生800円(700円)、18歳以下無料 ※学生・18歳以下の場合は証明書のご呈示が必要です ※20名様以上の団体は()内の割引料金 ※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料
会 場	泉屋博古館東京 〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1 TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル) https://sen-oku.or.jp/tokyo/
主 催	公益財団法人泉屋博古館
巡回予定	茶道資料館（2027年予定）

《展示構成（予定）》

第1章：いにしえへのあこがれ

いまから約三千年前、殷周時代に盛んにつくられた青銅器は、その造形レベルの高さからの時代の美術工芸の模範とされました。それだけでなく、周の時代は儒教のなかで理想的治世がなされた時代とされ、その遺風を伝える青銅器は特別に尊ばれるようになりました。

「東洋のルネサンス」とも称される宋代では、こうした青銅器に対する関心が急速に高まり、同時代の陶磁器や金工品などのデザインにも強く影響をおよぼすようになります。本章では住友コレクションのほこる中国古代青銅器と、いにしえへのあこがれから生み出された工芸品とともに展示し、のちの「唐物」へと受け継がれるデザインの源流をご紹介します。



《鼎父己尊》中国・殷後期（前11世紀）
泉屋博古館



《亞子觚》中国・殷後期（前12～前11世紀）
泉屋博古館

第2章：規範の形成——宋元時代の喫茶文化と文物

- ・宋代以降、士大夫と呼ばれる知識人層が当時の政治・文化の中心をになうようになり、彼らの価値観が強く反映された文物が重視されるようになります。同時に、点茶法とよばれる喫茶も流行し、その用途にかなう道具や、喫茶の空間を飾る工芸品も生み出されました。やがて、こうした文物にあらわされたデザインは、のちの時代まで受け継がれる「規範」を形成し、東アジアの文化に多大な影響を与えるようになります。本章では中国宋元時代の絵画・工芸作品を一堂に会し、この時代の中国で生み出された「古典」とはいかなるもののかを探っていきます。



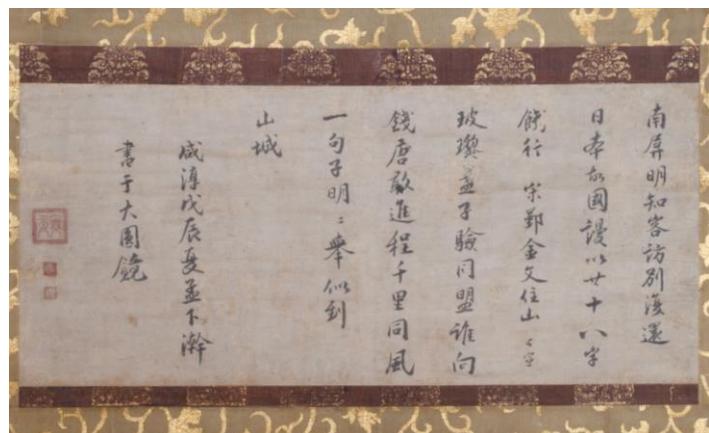
《黄天目茶碗 銘 薦》
中国・元～明時代（14～15世紀）
泉屋博古館東京



《文琳茶入 銘若草》
中国・南宋～元時代（13～14世紀）
泉屋博古館東京

第3章：日中交易と喫茶文化の伝来

- 日本中世では、海上交易を通じて大陸との交流が活発におこなわれ、当時の最先端の流行であった喫茶文化にかかわる文物ももたらされることとなりました。それらが日本国内で特に珍重されるようになり、やがて「唐物」として茶の湯の形成に大きな役割を果たします。一方で、単に中国文化に追随するだけでなく、国内でそれを模したもの、そこから日本独自のデザインへと進化したものも生み出されています。本章では日本と大陸の交流の証、そしてメイドインジャパンの胎動を示す作品から、喫茶の受容と文化交流のあり方にせまっていきます。



《無爾可宣墨蹟》中国・南宋時代（13世紀）
重要文化財 今日庵



《芦屋霰地真形釜》
日本・室町時代（15世紀） 芦屋釜の里

黙庵靈淵《布袋図》
日本・南北朝時代（14世紀）
重要文化財 泉屋博古館

第4章：君台觀左右帳記の時代

日本にもたらされた大陸の文物は、時の権力者によっても重視されるようになり、彼らによって活発にコレクションされるようになります。なかでも足利幕府八代将軍の足利義政が所蔵したとされる「東山御物」と、その飾り方や鑑定に関する指南書である『君台觀左右帳記』は、のちの時代の茶の湯のあり方に大きな影響を与えた。そこでは単に中国文化を受容するだけでなく、当時の日本人の価値観による選別のプロセスが働いており、「唐物」というカテゴリーがまさに日本文化的現象としてかたちづくられたことが、当時の作品群から見えてきます。本章ではそうした様相を、いわゆる「東山御物」の名品たちを中心に見ていきます。



国宝 伝閻次平《秋野牧牛図》
中国・南宋時代（13世紀）泉屋博古館



《芦葉達磨香合》
15~16世紀 泉屋博古館東京

第5章：そして利休へ

当初は中国文化の強い影響下で形成された喫茶文化は、中世後期になると、徐々に日本独自のものへと変貌を遂げていきます。喫茶の空間を飾る道具たちも、いわゆる「唐物」のみならず、国産の道具が評価を上げていくことになります。「和漢のさかいをまぎらかす」ことが重視されていくわけですが、そうしたなか登場する千利休が、いわゆる「わび茶」の大成者として歴史的に評価されていくことになります。しかし、利休の時代に用いられていた道具を見ていくと、意外にも大陸的要素の強いものがすくなくないことに気づきます。そして、そのなかには中国古代青銅器からの系譜を連綿と受け継ぐデザインも見られるのです。展覧会の最後を締めくくる本章では、利休のめざした茶の湯のあり方と、そこに受け継がれる中国古代からの系譜を、名品たちのなかから探っていきます。



《胡銅桃尻花入》
中国・明時代（15世紀） 個人蔵



《紅葉吳器茶碗》
朝鮮時代（16世紀）
泉屋博古館東京

《貸出可能画像・キャプション一覧》



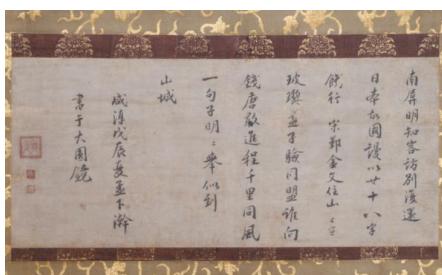
《鼎父己尊》
中国・殷後期（前11世紀）
泉屋博古館



《古銅象耳花入 銘キネナリ》
中国・元時代（14世紀）
泉屋博古館東京



《胡銅桃尻花入》
中国・明時代（15世紀）個人蔵



《無爾可宣墨蹟》
中国・南宋時代（13世紀）今日庵



《芦屋霰地真形釜》
日本・室町時代（15世紀）芦屋釜の里



《文琳茶入 銘若草》
中国・南宋～元時代（13～14世紀）
泉屋博古館東京



《黄天目茶碗 銘 薦》
中国・元～明時代（14～15世紀）
泉屋博古館東京



《紅葉吳器茶碗》
朝鮮時代（16世紀）
泉屋博古館東京



国宝 伝閻次平《秋野牧牛図》
中国・南宋時代（13世紀）泉屋博古館



重要文化財 黙庵靈淵《布袋図》
日本・南北朝時代（14世紀） 泉屋博古館

《お問い合わせ先》 泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子

展覧会担当：山本堯（泉屋博古館学芸員）、森下愛子（泉屋博古館東京 学芸課長）

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail : pr-tokyo@sen-oku.or.jp